

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：33307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520765

研究課題名(和文)ポートフォリオに基づく一貫した目標設定による日本人学習者の英語力に関する研究

研究課題名(英文)An Investigation into the Effects of English Study Portfolios with Consistent Goals in Terms of Japanese Students' English Proficiency and Motivation

研究代表者

米田 佐紀子(Yoneda, Sakiko)

北陸学院大学・その他部局等・教授

研究者番号：70208768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は小学生から大学生までを対象に、CEFRに基づくポートフォリオの使用により英語学習に目標を持たせることができるか、また、英語力に影響があるか検証することを目的として実施された。使用した材料はEuropean Language Portfolioに基づくポートフォリオ、ケンブリッジ英検、英語学習および動機づけ等に関する質問紙である。

合計4,479名の調査参加者のうち3年間の追跡調査データが得られた869名のデータ分析の結果、ポートフォリオ評価高群は低群に比べて、動機づけ、異文化友好オリエンテーションの得点が高いことが確認された。一方、導入には制度的枠組みが必要であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to investigate if English study portfolios related to the Common Framework of Reference for Languages are effective for goal setting and in enhancing Japanese students' English proficiency and motivation from elementary to university level. The materials used for this study were modified portfolios based on the European Language Portfolio, Cambridge English examinations and questionnaires regarding students' motivation in regard to English and the use of portfolios. Data from 869 subjects who participated in the three-year follow-up survey was scrutinized. The results indicated that the subjects with high appreciation of the portfolios corresponded with higher scores in motivation of learning English and in the intergroup approach tendency with people from different cultures compared to the subjects with low appreciation. At the same time, the study found that a systematic environment has to be established to achieve the best results from the portfolios.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 外国語教育

キーワード：ポートフォリオ 小中高大一貫教育 CEFR 国際的標準テストによる学力調査 自己評価 目標設定 動機づけ Can-Do

1. 研究開始当初の背景

文部科学省(文科省)は「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」を海外との取引で英語が使えないがゆえに不利益を被っている実態を踏まえ策定した(文科省, 2002)。しかしここからは小・中・高・大の一貫した具体的な指導は見えなかった。

米田(2010)が実施した学力に関する追跡調査では、教科として英語を実施していた小学校6年生が Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) の Pre-A1 まで到達するものの、高校・大学生では CEFR A2 レベルにとどまるものが多く、世界に通用するとされる英語力(「自立した言語使用者」B1~B2)がついていないことが示された。同時に、学年が上がるにつれてリスニング力が下がり、リーディング・ライティング力が上がる傾向が見られ、授業の焦点と一致しており、学校の授業が日本人学習者の英語力の鍵を握っていることが示された。

また、中学校生以上の生徒の英語を学ぶ理由は、教科や入試であるという「内向きな」動機づけが示され(長沼, 2009; 米田, 2010)、国際化を進めるための抜本的な対策が必要であることが示された。

このような社会的背景の中で、欧州で開発された CEFR を日本に取り入れる研究が進められていた(小池科研, 2004~2007、慶応義塾大学外国語教育研究センター, 2006~2010)。CEFR は人的・物的交流が国境を越えて盛んな欧州で策定された。言語観、言語学習、教授観は行動指向アプローチに基づいており、その「共通参照レベル」は言語学習の目標・方法・運用能力を判定する指標をまとめたものであり、国ごとに異なる基準を統合し、国や言語にかかわらず言語能力を等しく判定する尺度である(投野, 2013; 跡部, 2009)として従来の日本の英語教育の改革に資すると考えられていた。

慶応義塾大学外国語教育研究センターの研究は、小学校から大学院までの全学習ステージを包括的に捉えることで、外国語学習の一貫性を高め、複言語環境でのコミュニケーション能力を向上させ、国際社会で通用するコミュニケーション能力を育成するため、従来の受容型の学習から行動中心・タスクベースの学習へと言語教育全体のあり方を変えようとする取組であった(慶応義塾大学外国語教育研究センター, 2006-2010)。その中で、英語学習に一貫性と長期的見通しを持たせ、学習者を学力だけでなく学習経験や学習方法までトータルに捉え、自律した学習者の育成を図る一つの方法として、CEFR のポートフォリオ(European Language Portfolio(以下「ELP」))を使用していた。

ポートフォリオとは CEFR を具現化・普及するために作成されたもので、Language Passport(語学力についての主観的・客観的評価)、Language Biography(学習者の言語・

異文化体験の記述)、Dossier(自分で作った作品や単語帳など)の3部から構成されている(Council of Europe, 2006)。Council of Europe(2000)が18か国で実施した調査結果によると、7割の学習者・教師が、ポートフォリオは外国語学習に有効だと回答したと述べている。

以上を踏まえ、ポートフォリオ使用により日本人学習者にどのような影響が出るのか、CEFR が策定された欧州の言語教育観・学習法・教授法が、国際化が進む中日本の英語教育改革の手段となりうるのか検証する必要性があると判断した。

2. 研究の目的

長期的・短期的目標を持たせることは学習の促進に重要であり(橋本 1983)、その効果を測定するには、同一個人に焦点を当て、長期的に追跡して行う必要がある。

本研究では、CEFR に基づくポートフォリオを用いて目標設定をさせることで日本人英語学習に見通しを持たせられるか、英語力にどのように影響するか小学生から大学生までを対象に検証することを目的とした。また、欧州のものをそのまま日本に持ち込んでも必ずしも同様の結果が得られるとは限らない。その理由を特定することで、日本のこれからの英語教育の方向に対する示唆を得ることも本研究の目的とした。

本研究開始にあたり立てたりサーチクエスションは以下の通りである。

- (1) 学習者に長期的・短期的目標を明確に持たせることで英語学習に対する意義付けができるか。
- (2) 長期的・短期的目標の設定が英語力の向上(4技能)につながるか。
- (3) 英語学習を入試のみ目標にしている現状をもっと視野の広いものにし、学習が促進できるか。

3. 研究の方法

(1) 参加者

2011年度~2013年度の調査参加者は、千葉県、茨城県、神奈川県、石川県の国公私立小・中・高・大・高等専門学校生、合計4,479名(内訳:小学生(3校)904名、中学生(4校)1,745名、高校生(5校)1,361名、大学生および高等専門学校生(2校)469名)であった。

上記のうち、追跡調査として使用できるデータが揃った参加者数は、千葉県、神奈川県、石川県の国公私立小・中・高・大学生、合計869名(内訳:小学生(3校)130名、中学生(2校)183名、高校生(2校)429名、大学生(1校)127名)であった。

(2) 方法

材料

-1 学力調査: ケンブリッジ英検の模試またはコンピュータテスト、公式テスト(私立

小学校のみ)を用いた。種類やレベルは協力校の教員と相談し決定した。

-2 質問紙調査：表面に、英語学習・国際的志向性・ポートフォリオの使用・英語に関する質問が記載され、裏面には自己評価および目標設定のための Can-Do リスト(ポートフォリオの Language Passport と同様の CEFR の Can-Do リストを改編したものである)を記載した質問紙を用いた。

-3 聞き取り調査：担当教員に調査実施についての意見や感想および日頃の授業や児童・生徒の様子を聞いた。

(3)手続き

ポートフォリオ：CEFR の ELP を元に作成したものを協力校に配布した。配布時には、調査の目的・意図を説明し、極力授業に関連付け、頻繁に記入させるように依頼をした。

調査：原則半年ごとに協力校に実施要項を配布し実施してもらった。

分析と考察：統計分析を行い、学力や動機づけ、国際的志向性に変化が見られるか探り、考察した。

上記の手続きの中から不備が見つかったところについては、改良を行った。具体的には、2012年度から質問紙の4件法を5件法に、また Can-Do リストの Pre-A1 を他のレベルと同様3レベルに細分化し、児童や Pre-A1 レベルの生徒・学生にも対応できるようにした。

4. 研究成果

本研究の成果と課題について以下に述べる。

(1)データ収集について

小学校から大学まで、4県の14国公立学校で調査実施でき、約4,500名のデータを得ることができた。質問紙だけでなく学力テストも実施してもらえる協力校を得ることは難しい。そのような中で、経年データが得られた意義は大きい。経年データにより個人の追跡調査を多角的に検証できた。特に、小学校については「外国語活動」が音声中心の活動である中で、学力テストに参加してもらえたことは、今後教科化していく中で貴重なデータとなる。

(2)世界標準テストによる英語力の把握

「外国語活動」でつけられるリスニング力千葉県および神奈川県国公立小学校2校で「外国語活動」を受けた5年生と6年生の英語力を Cambridge English: Young Learners (YLE) のリスニングテストで追跡調査し検証した。テスト得点が、5年の年度末にはA校62.9%、B校56.0%だったものが6年の年度末にはA校80.1%、B校75.0%に到達し活動の焦点となる英語力は、Cambridge English および CEFR では4技能を総合的に測るため原則としては言い切れないが、4技能は測れなかったことを踏まえ、あえて述べるとすればリスニングテストで7割を超え、Pre-A1 まで

達する可能性が示された。しかも YLE ではリスニングといえどもスピーキングが入っている点で、小学校英語教科化に向けて朗報と言えるだろう。

高等学校普通科理系でつけられる英語力石川県の公立高等学校の2年生理系クラスでは、Computer-Based の Placement Test (Reading & Listening) を実施した。ポートフォリオを配布し授業で指導した実験群と、指導無しで持たせるだけの統制群に分けて半年間指導したところ、実験群は統制群に比べて有意な得点上昇を示した。1回目は、実験群40名中B1が9名、統制群32名中B1が8名、B2が1名であった。2回目は実験群40名中B1が17名、B2が1名、統制群40名中B1が7名でB2は0名という結果になった。クラスの約半数がB1以上となり、ポートフォリオを授業中に指導した効果が示されたと共に高校2年生でB1に到達するということが確認された。

(2)国際的志向性と動機づけの尺度の適合性確認について

質問紙調査に用いた国際的志向性(異文化オリエンテーション・国際的職業や活動への関心、海外での出来事や国際問題への関心、異文化間接近・回避傾向)は八島(2001,2002)で提唱された概念で、日本のような実体験を伴わない漠然とした異言語・異文化交流の環境の中で、「英語」という言語が象徴するものや異文化に対する興味関心などを包括する概念とされている。八島(2002)による高校生と大学生の学習意欲への関連性の検討ではモデルの妥当性が確認されていることから、これを採用することとした。一方、本研究では小学生から用いるため、物井(2009)で作成された児童用尺度を採用し、全学校種に用いることとした。

本質問紙の適合度の検証を行ったところ、国際的志向性は学習意欲と正の関連を示し、英語力へのつながることが高校生だけでなく小中学生でも成り立つことが示され、小学生~高校生まで適用可能であること確認した(西村,2014)。このことは、現在求められている小学校~大学までの一貫した実証研究上、大きな意義を持つと考える。

(3)Can-Do リストを用いた自己評価について

CEFR と直結している YLE の模試 (Pre-A1 ~ A2) を用いた、小学生~大学生、合計1,799名を対象に行った自己評価に関する調査では、適切な自己評価をするためには学力および年齢の両要因とも重要であるが、年齢と自己評価の間より、学力と自己評価の間の方が正しい評価との関連が強いこと、また正しい評価ができるレベルはA2であるという傾向をつかんだ(米田・細川・西村・物井,2013)。

(4)ポートフォリオ使用の効果について

本研究の中心的課題であるポートフォリオ使用による効果の検証結果から、次の成果と課題が明らかになった。

参加者および教員ともにポートフォリオのねらい(学習の振り返りや記録、目標立て等)について肯定的にとらえてはいるものの、あくまで理想であり現実的には難しいということが示された。CEFR、ポートフォリオ、ケンブリッジ英検どれもが日本で公的な効力がなく認知度も低いため、高い評価や有益感に繋がらないことが、その大きな理由であったことが分かった。参加者も教師も、制度的位置づけや教科書準拠のポートフォリオが必要だと指摘し、CEFRの理念が理想的であってもまだ English as a Foreign Language(EFL)である日本では導入に多くの課題があることが示された。

以下、上記の結論の根拠に至った検証結果について述べる。2011-2013 年度中に追跡調査データが揃った小学校～大学までの869名についてポートフォリオ評価が高い群(高群)と低い群(低群)とに分けて検証した(以下～)。高群と低群は5段階尺度の中央値で分けたが、小学生(3.8)、中学生(3.0)、高校生(4.0)、大学生(4.3)となり学校種によって評価に大きな差が出た。

英語力の向上については、全体的にはポートフォリオ評価高群が低群よりも得点が高い傾向が示された。小学校ではポートフォリオ評価低群も学力テスト得点が上昇し、大学では有意差は見られなかった。

英語学習に対する動機づけについては、全学校種においてポートフォリオ評価高群の動機づけが低群より優位に高かった。ポートフォリオによる英語学習の意味づけができるという考察が可能な一方で、動機づけが高い学習者がポートフォリオを評価するという逆の可能性も考えられた。

国際的志向性では、異文化オリエンテーションについて、全学校種でポートフォリオ評価高群のほうが低群より優位に得点が高く、異文化間接近・回避傾向でも小・中・高で有意差が見られ、評価高群のほうが異文化の人と接したいと言う気持ちが強いという結果が示された。その一方で、国際的職業や活動への関心、海外での出来事や国際問題への関心では概ね中点(3.0)を高群も下回った。人との関わりに関心はあるものの、海外での出来事については関心が低い事が示された。

統計による検証結果からは、ポートフォリオは小学生および動機が高いグループには有効である傾向が示されたと同時に、それまでの横断的研究同様、学校種および調査項目ごとに結果にばらつきがあり明確な答えは出なかった。

ポートフォリオの使用については、参加者から、「目標が持てる」「自分の出来ることが分かる」「成長が感じられる」などの肯定的な意見がある反面、「ポートフォリオが教科

書準拠ではない」「知られていない」「授業で使わない」「成績に変化がなかった」「実際そんなに英語は使わない」「異文化体験も検定も経験していないから」等の意見があり、EFLの環境からくる試験中心の動機づけが依然強いことが見えた。制度的位置づけの必要性が明らかになったと同時に、教師の介入に次第では変えられると想定される要素もあることが示された。

教員への聞き取り調査では、「目標を立てたり振り返ったりする点は良いが、動機づけが高い少数の生徒しかそのような事はしない。」「教科書準拠ならば指導しやすい。」という意見が出た。調査協力にあたって積極的な介入はなく、効果についても懐疑的だったことが明らかになった。ここから、制度的枠組みと教員への働きかけが今後の鍵になることが示された。

(5)課題と展望

今回の研究の目的は欧州で開発されたCEFRに基づくポートフォリオを日本の英語教育に取り込むことで英語学習や動機づけ、ひいては学力にどのような影響が出るかを検証することであった。

結果として Council of Europe (2000)のような肯定的な結果は得られなかった。CEFRが社会的に認知されること、教師が介入しやすいように教科書準拠にするなどの条件整備の欠如が背景にあり、これらへの対応の必要性が明らかになった。同時に介入をした高校では実験群が有意に高くなり条件整備が整っていないだけでも教師の姿勢によっては変化が起きることが示された。

研究遂行にあたっては、協力校担当者の異動やクラス替えにより、追跡調査ができなくなることや、研究当初の依頼が引き継がれなくなるなどの問題もあった。CEFRをはじめ、ポートフォリオ、ケンブリッジ英検の認知度の低さ、時間的制限、ケンブリッジ英検のレベルの高さゆえ参加者の年齢に適したテストが実施できないというケースも多く見られ、検証に用いる材料の選択も課題であった。

上記の課題からEFLという環境がもたらす影響を変える困難さが、世界的尺度を用いて調査した今回の研究から改めて浮き彫りとなった。

しかし、国際化はますます進んでおり英語力を挙げることは日本にとって、喫緊の課題である。制度的枠組みとしては、2011年6月文部科学省(文科省, 2011)が公表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を公表し、提言1の「生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する。」の中で「学校は、学習到達目標をCAN-DOリストの形で設定・公表し、達成状況を把握。」と述べCEFRを踏まえた提言を行っていることから公的整備はされていく可能性が見えている。

また2013年12月13日には、2020年の東

京オリンピック誘致が決定したことを受けて、「初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるため」の『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』が公表された(文科省, 2013)。

CEFR をめぐる環境整備は文科省の方針だけではない。教材やテストについても、CEFR のレベルを採用した様々な開発がなされ、広がりを見せている。日本ではNHKのラジオ・テレビの英語教育番組で採用し(NHK 出版, 2014)、また海外では TOEFL (Educational Testing Service, 2008) も CEFR を採用している。

最後に、今回の研究で見えた課題に基づいて、国際社会で通用する英語力をつけるための提案をもって報告書の結びとする。

CEFR の理念を反映した一貫性ある教科書作りをする。その中にポートフォリオを入れ、Can-Do のみではなく自らの学習を振り返ったり目標を立てたりすることができるようにする。

ポートフォリオの Can-Do は教員と学習者が共有できるようにする。

日本で広く使用されている様々なテストについて CEFR レベルとの確認ができ、世界的な視野が持てるようにする。

国際化は足元まで来ている。現場で児童生徒と対面し一番影響力を持っている学校・教師が変われば、児童・生徒も変わるだろう。

CEFR ではテストだけではなく一人一人の学習者を生涯学習の視点で捉え、また言語を1つの技能ではなく4技能で測るところなど多くの知見を含んでいる。国際的な英語力の伸長を測っている今、日本が学ぶべきこと、試すことは多くあると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

米田 佐紀子、西村 洋一、細川 真衣 (2014) 「高校生の英語学習に対するポートフォリオの影響の検証」『中部地区英語教育学会 紀要』第 43 巻、査読有、pp. 117-124

米田 佐紀子(2014) 「日本人高校生の英語学習におけるポートフォリオ使用の有効性と課題」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 研究紀要』第 6 号、査読無、pp. 185-194

西村 洋一(2014) 「小・中・高校生における英語学習の動機づけ 国際的志向性を用いた検討」『北陸学院大学・北陸学院

大学短期大学部 研究紀要』第 6 号、査読無、pp. 161-171

米田 佐紀子、安久 ゆい、田畑 力也 (2014) 「Can Do リストで高校授業は変わるか?」『第 43 回中部地区英語教育学会富山大会 発表・提案要項』、査読無、pp. 22-23

米田 佐紀子(2014) 「小学校の事例報告 北陸学院小学校における事例」『外国語教育フォーラム 金沢大学外国語教育論集』第 8 号、査読無、pp. 5-13

米田 佐紀子、細川 真衣、西村 洋一、物井 尚子(2013) 「小・中・高・大学生の自己評価と英語力に関する研究 CEFR に基づく Can Do リストとケンブリッジ英検模試を用いて」『中部地区英語教育学会紀要』第 42 巻、査読有、pp. 131-138
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009635293>

米田 佐紀子、西村 洋一 (2013) 「日本人大学の英語学習における学力と動機に関するポートフォリオの有効性の検証」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 5 号、査読無、pp. 203-215

細川 真衣、西村 洋一 (2013) 「Can-Do リストは英語が苦手な日本人大学生の英語力向上と動機づけに効果を与えるか?」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 5 号、査読無、pp. 303-312

米田 佐紀子、西村 洋一、細川 真衣、(2012) 「Can-Do リストは日本人大学生の英語力と動機づけに効果を与えるか?」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 研究紀要』第 4 号、査読無、pp. 93-103

[学会発表](計6件)

Yoneda, Sakiko, & Nishimura, Yoichi. (2014) How Does English Literacy Education Affect Japanese Primary School Children's Ability and Motivation? *AILA World Congress 2014, Brisbane Convention and Exhibition Centre, Brisbane, Australia. August 8, 2014.* 査読有

米田 佐紀子、西村 洋一、細川 真衣 (2013) 「高校生の英語学習に対するポートフォリオの影響と使用実態」第 43 回中部地区英語教育学会富山大会、2013 年 6 月 30 日、富山大学、査読無

米田 佐紀子、安久 ゆい、田畑 力也 (2013) 「Can Do リストで高校授業は変わるか?」第 43 回中部地区英語教育学会富山大会、2013 年 6 月 29 日、富山大学、依頼発表

米田 佐紀子、細川 真衣、西村 洋一、物井 尚子(2012)「小・中・高・大学生の自己評価と英語力に関する研究 CEFR に基づく Can Do リストとケンブリッジ英検模試を用いて」第 42 回中部地区英語教育学会岐阜大会、2012 年 7 月 1 日、岐阜市文化産業交流センターじゅろくプラザ、査読無

Yoneda, Sakiko, & Hughes, Jason. (2011) CEFR-aligned Cambridge Testing Outcomes in Japan and Challenges to Adopting a Global Evaluation Standard. *ALTE (The Association of Language Testers in Europe) 4th International Conference*. Jagiellonian University, Krakow, Poland. July 11, 2011. 査読有
<http://www.alte.org/2011/presentation/pdf/yoneda-hughes.pdf>

Yoneda, Sakiko, & Hughes, Jason. (2011) Evaluating Japanese Students' Progress Using Cambridge Examinations. *The 9th Asia TEFL International Conference*. Hotel Seoul Kyo-Yuk Mun-Hwa Hoe-Kwan, Seoul, Korea, July 29, 2011. 査読有

[その他]

米田 佐紀子(2013)「児童英語教育研究の現状と方向性 特に自律性の観点」NPO 法人海外文化センター、2013 年 8 月 3 日、文化学園大学、依頼講演

米田 佐紀子(2013)「興味の持続と自宅学習 教師と親の役割」NPO 法人海外文化センター、2013 年 8 月 3 日、文化学園大学、依頼講演

米田 佐紀子(2013)「Can-do リストでつながる英語教育 小学校の事例報告 北陸学院小学校における事例」金沢大学外国語教育研究センター・金沢大学共通教育機構主催 言語教育の小・中・高・大連携シンポジウム、2013 年 3 月 16 日、しいのき迎賓館、依頼発表

セミナーの開催

タイトル：Can Do ステートメントで動機づけを高める 小中高大とつながる英語学習

共催：中部地区英語教育学会石川支部
北陸学院大学・本科研

日時：2012 年 9 月 29 日

場所：北陸学院大学

対象：小学校～大学の教員および学生等

講師：跡部 智氏(慶應義塾普通部教諭(当時) 前慶應義塾大学外国語教育研究センター副所長)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米田 佐紀子 (YONEDA, Sakiko)
北陸学院大学・人間総合学部・社会学科・教授
研究者番号：70208768

(2) 研究分担者

西村 洋一 (NISHIMURA, Youichi)
北陸学院大学・人間総合学部・社会学科・准教授
研究者番号：70406809

(3) 研究分担者

細川 真衣 (HOSOKAWA, Mai)
北陸学院大学・人間総合学部・非常勤講師
研究者番号：00598138

(4) 研究分担者

物井 尚子 (MONOI, Naoko)
千葉大学・教育学部・英語科・准教授
研究者番号：70350527

(5) 研究分担者

ヒューズ ジェイソン (HUGHES, Jason)
北陸学院大学短期大学部・コミュニティ文化学科・講師(削除時の所属)
研究者番号：40601159